
stigma ~ 桜のお話 ~

威純 鷹夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

stigma ～桜のお話～

【Nコード】

N9671F

【作者名】

威純 鷹夜

【あらすじ】

主人公、坂井歩さかいあゆむの前に現れた謎の少年。彼はとても不思議でそして……主人公と仲間達が巻き起こす学園ミステリーホラー！

序章 始まりのデアイ

桜舞う春。

坂井 歩さかい あゆむは入学式のため和泉ヶ丘高校に来ていた。

この高校を選んだのは家から近く、設備も整っているというありきたりな理由だ。

「高校生活かぁ・・・」

正直、坂井 歩は高校生活にあまり期待はしていなかった。どうせ中学と同じように自然に時が流れ自然に終わるのだ。坂井 歩の中学校生活はいつも同じことの繰り返しだった。

朝起きて、学校へ行き、勉強して・・・毎日同じことの繰り返し。

高校生活でなにか変わったことはないだろうか。

そんなことを思って時計を見ると8時3分。

少し早めに僕は校舎に入ろうと思い、人混みを進んだ。

人混みは新入生の他にも在校生も何人かいた。

みんなこれからのことを考えいきいきとした顔をしていた。

しかし歩はこれからのことを考えるとあまり気分が乗らなかった。

「どうせ変わったことなんてないんだろうな」

そんなことを考え校庭を歩いてると人混みの中に違和感を感じ、人混みをしばし見つめた。

人混みの中にとても無機質な顔をした少年がたっていた。

明らかな異質な雰囲気をかもしだし、しかし彼の違和感には誰も気づかない。

まるで誰も彼に気づいてないようだった。

例えるなら、彼だけが世界から切り取られたように。歩は彼を見つめた。

周りからみたら不自然なくらい彼を見つめ続けた。

まるでそうすることが正しいかのように。

そして彼と目が合った。

「……！」

瞬間、体が戦慄し、目を疑った。

彼にはたくさんの白い手ががんじがらめにまとわりついてたのだ。先程までは見えなかった手。

まるで手だけが視界に入らなかったのよう。

しかしそんなことはあり得ない。

あんなにもたくさんの手に気づかないはずがない。彼の周りの人を見たが誰も手には気づいていない。

どうやら気づいているのは僕だけ……いや、歩だけが狂っているのかもしれない。

彼は僕を見つめ続けそして、僕に向かって歩いてきた。

何故か本能が逃げようとした。しかし体は全く言うことを聞かず、ただ立ち尽くすのみ。

自分の心臓の音が聞こえる。

緊張ではち切れそうな心臓がこれでもかと言うくらい高らかに鼓動を上げてる。しかし彼は歩みを止めない。

そして気づけば彼は目の前に立っていた。

もう心臓の音が周囲に聞こえてるんじゃないかと思うくらい心臓の鼓動は高まっていた。

彼の視線が僕に突き刺さり、体がはじけそうになった。しかし不意に彼は口を開いた。

「何か用か？」

「……！」

彼の言葉が詩のように僕に響いた。

そして一瞬、視界がずれたような気がして改めて彼を見ると手が消えていた。

「……新生？」

僕はようやくそれだけを口にできた。

しかし彼は、

「そうだが？君には俺が新入生以外に見えるのか？」一蹴されてしまった。

。。。。

静寂。

周りをもつとにぎやかでうるさかったはずなのに彼と僕の周りの空間だけが壊れたようにそこは静かだった。

そしてやはり、彼が静寂を壊した。

「用がないなら行くが？」

「あつ。。。名前は？」

とつさに僕は訪ねていた。何故か彼の事を少しでも知りたいと思ったのだ。

「。。。和泉 蓮（いずみ れん）だ。」

こんな

「場」にも関わらず歩は律儀にも名乗り返してしまった。

「僕は坂井 歩。。。新入生どうしよろしく。」

そついい右手を出したら彼はクルツと後ろを向いて

「すまないが、用がある。他に要件があればまた今度。」

そつ言い残し、スタスタと校庭を歩き校舎に消えて行ってしまった。急に突風が吹いた。

彼が消えたことで世界が悲しんでるかのようになり、桜が狂ってるかのようになり、舞いだした。

歩はしばし校庭にたちつくした。

なぜ彼の存在があれほど気になったのか。

なぜ彼はあんなにも異質だったのか。

なぜ彼はぼくに話しかけたのか。

いくら考えても答えは出なかった。

ふと時計を見た。8時28分。

「。。。！？」

歩は本気で驚いた。

彼と話していたのは5分ほどに感じたのに実際は25分近く彼と話

していたのだ。そして新入生が体育館に集合する時間は8時30分。周りをよく見ると自分以外誰もいない。僕は体育館まで大急ぎで走った。

2000年、春。これが彼と僕の初めての出会いだった。

一章 桜の木のシタテ

高校生活が始まって二週間。僕はやっと高校での暮らしにもなれてきた。

この和泉ヶ丘高校は普通の高校と比べると生徒数が少ない。

何故かと言うとこの地域はかなり田舎寄りで子供の数がお世辞にも多いとは言えない。偏差値も平均、設備も中の中、何か取り柄があるかと言われたら広大な敷地くらいだろう。

しかしわざわざその程度の理由でこの学校に来たがる人はまずいない。

大半は田舎寄りに住んでて近くの高校がここしかないと言うだけ。そしてこの学校は名前の通り和泉市に位置してる。和泉市の人口も決して多いわけではないが、極端に少ないというわけでもない。高校は1クラス30人くらいで構成されて、1学年3クラスとなっている。

そんな中、僕は中学からの友人、日下部くさかへ 悠也ゆうやとクラスが一緒になった。

悠也はいつものようにワイシャツの上にカーディガンを来ていた。

この和泉ヶ丘高校は私服登校可なのだがみんな私服を選ぶのがめんどくさいらしくだいたい学校指定の制服だ。

僕はズボンにワイシャツ、その上にブレザーを着てネクタイを締めるという学校指定の格好だ。

悠也と部活の話になった。

「歩は、何の部活入るよ？」

「もちろん演劇部！」

僕は即答した。

そう、僕は中学の頃から演劇をやっており高校でも続けようと決めていたのだ。

「やっぱりそうか」

悠也は少し苦笑気味にいった。

「悠也は何の部活入るんだ？」

「俺も演劇部かな」

「悠也もかよ」

僕も少し苦笑気味に言った。お互いに聞いたがだいたいわかっていった。

悠也とは中学の頃から演劇部で一緒なのだ。

そして僕は演劇部に一人誘いたい人物がいたのだ。

名を和泉^{いずみ} 蓮^{れん}、そう僕が入学式であった不思議少年だ。

彼とは運が良く同じクラスだった。

彼の格好はまた不思議で学校指定のズボンにワイシャツ、その上に太ももの下くらいまであるロングカーディガンを着ているのだ。

学校生活はもう二週間も始まっているのに彼は誰とも話していない。一人だけクラスで浮いていた。

しかし僕はそこがまた気に入った。

誰とも話さない一匹狼、とても憧れる存在だ。

僕は変わった人間が大好きだ。

そして入学式の次の日から何回も話しかけようと思ったのだが、あの雰囲気^{きふき}に気圧されて話かけられないのだ。

だから悠也を誘うことにした。

「悠也、ちょっと付き合ってくれ」

「何に？」

「和泉君を演劇部に誘おうと思うんだけど」

この時の悠也の顔は表現しにくいものになっていた。

「あの`悪魔少年`か？」

悪魔少年とは和泉君のことだ。

誰が言ったかは知らないがそのあだ名はみんなに広がっている。

そのあだ名の原因は彼の雰囲気と読んでいる本が原因だろう。

昨日彼が読んでいる本を横目で見たのだが何と書いてあるのかわからない字だった。

少なくとも日本語ではないだろう。

僕は彼にすごい興味を持った。

一人でたたずみ謎の本を読む少年。

これほどミステリアスな高校生がいるだろうか？

僕は見たことがなかった。考えているといてもたってもいられなくなった。

「行くよ」

そういつて悠也の腕を無理やり引き彼の下まで歩いた。

途中、悠也は

「マジで行くのか？」

などぼやいていたが気にしない。

そして彼の目の前にたった。

実際に彼の目の前に立つと何かに圧迫されるかのような感覚に襲われ緊張した。そして意を決して、

「おはよう、和泉君。入学式の時に話した坂井だけど、覚えてるかな？」

ごく自然に話したつもりだがもしかしたら緊張でカタコトになっているかもしれない。

隣の悠也は半分僕に隠れている。

そして彼は静かに答えた。

「覚えている。それは俺の記憶力を試した質問か？」瞬間、場が凍りついた。

こんな答え方されると思わなかったので、しばらく思考が停止した。そしてなんと行っていいのかわからなくなり思考が空回りし始めた。とりあえず何かしゃべらなければと思い、

「いやそういつつもりじゃないんだけど・・・学校生活とかどうかな？」

今さらな質問をしてまた彼は静かに答えた。

「特に問題はない」

「そう。部活は何に入るの？」

僕はとうとう本題を切り出した。

彼はしばらく下を向き悩み、ふと顔を上げて

「まだ決めていない」

僕が思うに彼はきつと部活などしたくないのだ。

しかしこの和泉ヶ丘高校は部活動半強制になっている。

なんでも部活も授業のうちという変わった学校なのだ。

まだ決まっていないという彼に僕はちょうどいいと思い勧誘に入
た。

「一緒に演劇部に入らない？」

僕が彼を誘うのにはちゃんと理由がある。

雰囲気や存在感などもあるが、あれはつい三日前くらいの国語の授
業で役になりきって読んでみようという授業があったのだ。

その授業で彼は両親が死に心を閉ざした少年のセリフを読んだ。

『この世界に幸せなんてない。あるのは絶望のみ。なぜ神様は僕を
この世に生んだのだろうか？』というセリフだったのだが彼が読ん
だ瞬間教室の空気が変わった。

彼は詩を読むように静かに読み、それでいて絶望で溢れているとい
う感覚をもちもしたしとても人間が読んでいる風に聞こえなかった。
先生も呆気にとられ呆然としていた。

彼が読み終わるまで教室の時間が止まった。

喋るものなんていなかった。

そして読み終わり彼が席に着いた音で教室の時間は動きだした。

僕はこの時からずっと彼を演劇部に誘おうと決めていたのだ。

そして彼は意外なことに

「かまわない」

一言だけいった。

きつと彼は部活動をやるにあたってなんでもよかったのだ。

たまたま誘われ断るのがめんどくさかったから入ってくれたのかも
しれない。

しかしそうだとしても彼と劇をできると思うと僕はとても嬉しくな

った。

「じゃあ今日の昼休みとか暇かな？入部届出しに行かない？」

「わかった、昼休みだな」

相変わらず無表情に答えた。

「次の英語って和泉君は教室だよね？」

「ああ」

「じゃあ僕はLL教室の方だからまた後で」

僕は次の四限の授業のため教室をでた。

教室を出た瞬間に悠也が話かけてきた。

「步って、悪魔少年」と知り合いだったのか？」

当然の質問だった。

悠也は彼と僕が入学式に話をしたことを知らないのだ。

「うん。入学式の時に少し話したんだ。悪い人じゃないよ」

「いや、それはわかるけど」そんな会話をしながらLL教室に向かった。

この学校の授業はクラス内で別れることが多い。

英語もその一つだ。

変わった風習だが少人数のが教えやすいし理解もしやすい。

この風習はこの学校のいい所の一つだ。

残念ながら僕と彼は違うグループだった。

LL教室に向かう途中窓の外を眺めた。

この学校には桜の木がとても多く植えられててその中でも一本、他の木の1.5倍はあるんじゃないかという桜の木があった。

生徒の間では大桜と呼ばれていた。

その巨大な桜の木を眺めていると、不思議な光景を見た。

一人の少女が大桜に向かってフラフラと歩いていた。もう授業も始まるのであんな所に生徒がいるはずなかった。

しかし少女はフラフラと大桜に向かって歩いてる。しばらく眺めていると

「おい、歩。授業に遅れちゃうぞ？」

前から悠也が声をかけてきた。
確かにそろそろ時間がまずい。

「今行くよ」

僕は駆け足気味に悠也を追いかけた。

そして四限の途中、一人の少女が自殺した。

この情報が生徒全員に回るのに一日もかからなかった。

これが始まりだった。

二章ノ一 赤ト桃

桜の並木道を目指し一人の少女があるいていた。

名は荒川あらかわ 優子ゆうこ。

今年の三年生だ。

優子は真正正銘のオカルト好きだった。

先程、友達から聞いた学校の七不思議の中にとっても興味深いものがあつたのだ。それはこのようなものだった。

『この学校の大桜は異界に繋がっている』

それを聞いたたとたんいてもたつてもいられなくなり、優子は四時間目の授業を取らないことにした。

この学校は完全単位制なので一回くらい休んでも全然平気なのだ。

そして優子は三時間目が終わるとすぐに教室を飛び出していた。

そして桜の並木道に向かった。

並木道に向かつて歩いていると後ろから足音が聞こえた。

「……」

何か気になり後ろを向いて見たが誰もいなかった。

またしばらく歩くと後ろから足音が聞こえた。

もう一度振り替えて見るとやはり誰もいない。

そして前を向いた瞬間

「うわっ！」

少年が立っていた。

それは優子が知っている人物だった。

というよりはこの学校で彼を知らないのは新入生くらいだろう。

「こんなところでどうしたんですか？」

優子はなぜ彼がこんな所にいるのか不思議に思い訪ねてみた。

しかし目の前の少年は無言でたたくみ不気味な笑顔を浮かべていた。

「あ……」

優子は少し怖くなりとりあえず話しかけた。

すると

「今、大桜の扉は開いている。君の期待するものが見られるよ。ふっ……」

目前の少年は不思議なことを言い不気味に笑ってみせた。

「意味がよくわからないんですが……」

「行けばわかるよ」

少年は一言だけいいはなちそのまま優子の隣を通り抜けた。

そのとき少年が小声で何かを言っていた気がした。

何と言ったのか、声が小さすぎて聞こえなかった。

優子は少し恐怖を覚えたものの七不思議への好奇心が強かった。

そして並木道までの歩みを再開して目の前まで来た。

そして並木道に入った瞬間、視界が一回転した。

「……!」

思わず膝を着き、目の前を見ると驚愕した。

先程まで淡い桃色だった桜が、真っ赤になっているのだ。

まるで上から鮮血を被ったかのように。

そして大桜が赤々とその存在を主張していた。

大桜の目の前に人らしいのが立っていた。

最初は教師かと思った。

しかしよく見るとそれは人間ではなかった。

顔は半分が溶けたように崩れていて眼球が飛び出していた。

腕は関節と全く違う方向に曲がっており、片足は膝から下がなかつた。

「うっ……!」

優子は声が出なかった。

あまりの恐怖で声帯が壊れてしまったかのように。

そんな優子には関係なくその人の形をしたものは這いずるように近づいてきた。

優子は四つん這いになるようにして逃げたが全く進ま

なかった。

なかつた。

それもそのはず、桜の木の根元から沢山の腐ったような腕が出てき

て優子の足を掴んでいたのだ。

優子は必死に考えた。

どうしたらこの恐怖から逃げられる？

しかし思考はすぐに終わった。

優子は人の形をしたものがあと1メートルというところまで近づいた時に、桜の枝の尖った部分で自分の目を突き刺した。

「ぎゃあああああ！」

激痛。

目からは血と涙とよくわからない液体が流れ出た。

そして枝が突き刺さるように目の前に倒れた。

バタツ。

グチュツ、優子の目に枝が深々と突き刺さり脳までたっした。

そして絶命した。

一人の学生が優子の自殺を発見した。

授業をサボっていた生徒だったらしい。

その学生は優子を見つけるなり叫び、教師が集まり騒ぎとなった。

二章ノ二 友達ノ友達

そのころ僕と悠也と和泉君は演劇部の顧問の所に向かっていた。前を僕と悠也が歩き、その２メートルくらい後ろに和泉君が、端から見ればなんと不自然な歩き方なんだろう。

そうして少し歩くと職員室に着いた。

職員室前は何故か生徒で溢れかえっていた。

「なんかあつたのかな？」

素朴な疑問を口にして

「事件かもよ？」

少し楽しそうに悠也が言った。

「不謹慎だぞ？」

「でもさあ、なんかあつたとしか思えないっしょ？」確かに悠也が言ってることも理解できる。

これだけの人混みだ、何かあつたのだろう。

「和泉君なんか知ってるかな？」

駄目元だが聞いてみた、するとやはり

「知らんな」

と一蹴された。

そして人混みの中の一人の生徒が大きな声で

「三年の女子が桜道で自殺したんだって!!」

それは少し離れた僕等にも聞こえた。

「自殺……？」

学校で自殺なんて本当だろうか？

しかしこの騒ぎを見る限り本当だろう。

すると和泉君が

「自殺……桜道……まさか……!ちっ」

和泉君はいきなり考えこみ何か掴んだのか舌打ちをして一人で去って行ってしまった。

「あつ和泉君！」

声をかけたがたぶん聞こえてないだろう。

「悠也！追いかけるよ！」

悠也に大きい声でそう伝え僕は走り出した。

後ろから悠也が

「仕方ねえな……」

しぶしぶとついてきてた。

程なくして和泉君を見失った。

「はぁ……はぁ……どこにいった？」

僕は完全に息切れ状態だった。

「ふうー、悪魔少年の行動パターンなんか知るかよ」

悠也は一息で呼吸を調えながら言った。

悠也の体力はかなり凄かった。

これなら陸上部でも全然通じるだろう。

しかし今はそれどころではない。

「思考しろ……思考しろ……脳を休めるな……和泉君

はどこへ行った？」

悠也は黙って見ていた。

歩は一度思考を開始すると他の声が聞こえなくなる。すごい集中力

だ。

「桜だ！悠也、桜の並木道だ」

それだけ言うと歩は全速力で走った。

悠也も歩を追いかけた。

桜の並木道までは結構距離があった。

五分くらいしてやっと桜の並木道に着いた。

予想通り和泉君はいた。

「和泉君……！」

かすれながらも叫んだ。

「ん？坂井か。」

首だけを後ろに向け僕だと確認するとまた前に向き直った。

やっと和泉君の隣にくと和泉君は何かを眺めているようだった。

「どうしたの？何かあった？」

「確認のためにきた。やはり予想通りだ。もっと早くに手を打っておくべきだった」

「……」

和泉君が何を言ってるのかわからなかった。

「頭大丈夫か……？」

悠也が隣でぼやいた。

「聞こえているぞ」

「……！？すみません……」

何故か悠也は謝っていた。

「君たちはもう帰った方がいい。この件には誰も巻き込みたくない」
和泉君は静かにそれでいて鬼気せまる様子で言った。僕は思わず反論した。

「会ってから数週間しかたつてないし、あんま話したこともないけど……僕達もう友達でしょ？友達は放っておけないな」

「っ……！」

和泉君はとても驚いた顔をしていた。

そして和泉君は

「最悪死ぬ危険もあるが」

「ほらそんなときは一蓮托生ってやつだよ」

僕は正直かなりビビっていた。

しかし友達を一人置いて逃げられるような人間でもなかった。

和泉君からの気迫でこの事件はすごく危険だと僕にもわかる。

しかしここで逃げたら和泉君を見捨てるのと一緒だ。もう腹はくくった。

「歩の友達なら、俺の友達でもあるな」

悠也は言った。

「俺は日下部 悠也。よろしくな」

「……」

和泉君は少し悩んでいたしかし

「……俺は和泉 蓮。巻き込んですまない」

「だから気にすんなって」

悠也は一回相手とうちとけてしまえばすぐに仲良くなれる才能を持つていた。

「二人とも……すまない」

「大丈夫」

「だから気にすんな」

僕も悠也もさつきまで和泉君と形だけの友達だったんだと思う。

しかし今は本当の友達になれた気がする。

そんなことを思ってた時

「ふっ……」

和泉君が少し笑ったように見えたのだ。

彼の笑顔は一瞬だったが僕は見逃さなかった。

どうやら悠也は気づいていない。

この時僕は和泉 蓮と言う人間は冷たい訳でもなく感情がない訳でもない、ただ感情を表にだすのが苦手なだけなのだと思った。

そして和泉君は口を開いた

「まずこの場所から離れよう」

その一言により校舎に戻ることにした。

そして校舎を向き和泉君を見た瞬間、彼に白い手がかんじがらめにまとわりついてたのだ。

「……!」

声が出なかった。

誰も僕には気づいていない。

悠也も僕の前にいて和泉君を見ているが気づいていないようだ。

「どうした？」

和泉君が振り向いた。

それと同時に桜の花びらが狂いだした。

僕は一瞬視界を奪われすぐに和泉君を見直すと手は消えていた。

「いや・・・なんでもないよ」平然を繕い答えた。
「そうか」

和泉君は一言だけ言いまた歩きだした。

僕も悠也も続いて歩きだした。和泉君は歩きながら何か考えていた、
そして

「坂井、お前視えるか？」

いきなりの質問だった。

さっきの手のことかと思っただが、違うようだ。

「単刀直入すぎた、霊などは視えたりするか？」

残念ながら僕には霊感などは存在しない。
でも

「いや視えない、霊感もない。だけど・・・うーん」

「だけど？」

何て言っただいなのか悩んだ、そしてそのまま伝えることにした。

「霊感がある人が近くにいると勝手にその人の霊感が流れ込んで
きて見える事がごくたまにある・・・」

すぐく伝えるのが下手だと自分でも思った。

「理解した。つまり近くににいる人のチャンネルを共有できるんだな
？」

「チャンネル・・・？」

なぜ霊感の話をしていてチャンネルがでてくるのか全くわからな
かった。

しかし静かに和泉君は語りだした。

「いいか？人間というのは目と言う受信機を使って映像を脳内に光
情報として取り込むんだ。そして普通の人間はこの目に6CHしか
持っていない。6CHに映る世界はみんなが見ている普通の世界だ。
しかし一般に霊能力者と呼ばれている人達は6CHの他に8CHも
見ることが出来るんだ。8CHには6CHに映ってないものが映っ
ている。それを一般に霊と呼ぶんだ。つまり坂井、お前は6CHし
か映せないが、近くに8CHを持つている人がいればそれを共有で

きる。よくあるケースだ。何の不思議もない。」
なるほど。

それでチャンネルなんて言葉が出てきたのか。
しかし高校生が知っている知識か？

そんなことを思いながら考えていたら

「日下部」

一言だけ彼は言った。

「ん？」

「靈感はあるか？」

「全くないね」

少し残念そうに悠也は言った。

「そうか」

そしてこんな会話をしているうちに校舎内の教室に着いた。

今日は一人の生徒の自殺により緊急下校となり明日は自宅学習日となった。

和泉君は学校が終わると何人かの生徒に話かけていた。話しかけられた生徒は和泉君に話しかけられてかなり驚いていたようだ。

そして僕達三人は学校の近くの公園に行くことになった。

二章ノ三 解析チヨウサ

学校近くの公園はとても静かだった。

『東和泉公園』

公園の看板にはそう書かれていた。

「今日の女の子の自殺はただの自殺じゃないの？」

僕は前々から思っていた疑問を口にした。

「まだわからん。しかし俺が予想するにただの自殺ではないと思う」

和泉君は静かに言い放ち、下を向き考え始めた。

「俺はただの自殺だと思うんだが……」

悠也が特に考えるでもなくいった。
すると

「日下部、お前は自殺するとしたらどうやって自殺する？」

「……リストカットとか睡眠薬を大量に飲むか、飛び降り、首吊り……といった所か？」

悠也は少し言うのが嫌そうだった。

身近な少女が自殺したのに、自殺の話なんてしたくはないだろう。

「まあ普通はそうだ。お前達はあの少女がどうやって自殺したか知っているか？」

「知らないな……」

「俺もだ」

僕と悠也はほぼ同時に答えた。

すると和泉君は静かに

「少女は桜の枝を自分の目に刺し、それが脳までたっし死んだらしい」

「……！」

僕は驚くと同時に多大な寒気が走った。

そんな自殺聞いたことがない。

「それってホントなのか？」悠也が掠れた声で訪ねていた。

どうやら悠也もかなり驚愕しているようだ。

「ああ、多数の生徒から様々な情報を聞き、事件に見合わせた少年に真実を聞き出した」

僕は和泉君の行動の速さに啞然とした。

「そんなの自殺っていうのかよ……」

悠也はそんな少女の自殺に納得できないようだった。

「少女は自分で自分の命を断ったんだ。それはどんな形であり世間一般ではひとくくりに自殺と呼ばれる」和泉君は冷静に、無表情で事実を語った。

本当に彼に感情があるのか、改めて疑問に思ってしまった。

「じゃあ何でそんな自殺をしたんだ……」

僕は混乱していた。

そんな自殺の状況を聞いたことがない。

「怪奇に触れてしまったんだろう」

「怪奇……?」

和泉君はよくわからないなことを言った。

「怪奇とは……いやあとの話はまた今度にしよう」

気づけばもう六時近かった。

「二人は今日話したことを誰にも言わないで欲しい。そして今日のことを自分達の中でまとめといてくれ」和泉君は的確な指示をだした。

僕はさつきから思っていたことを言った。

「これから三人で行動するならお互いに連絡先を交換しといたほうが良くないかな？」

これには和泉君も賛成してくれたようで、連絡先を交換した。

「二人には頼みたいことがある」

和泉君からのお願いなので少しびっくりしたが、快く引き受けた。

悠也は人の頼み事は断らないやつなので僕と同じように引き受けた。

「なにをすればいいの？」

「全部で二つ。今日の自殺した少女についてできるだけ詳しく調べ

てほしい。それとあの大桜についてだ」

「大桜……？」

「ああ、あの大桜は事件に関係している可能性がある。いつ植えられたのか、他にも大桜に関する事件は今まであったか。とりあえず調べられるだけ調べてくれ」

正直かなり難しいと思ったが引き受けた以上頑張るしかない。

「わかったよ、じゃあ明日はそれらのことについて調べる。報告は明後日の学校でいいかな？」

和泉君は頷き

「わかった、この件はさつきも言ったように危険な可能性がある。くれぐれも注意して調べてくれ」

「了解、じゃあ明後日に」

「じゃっ……」

和泉君は僕に忠告を残して、公園を後にした。

公園には僕と悠也二人だけが残った。

静寂が満ちていた。

そして僕達の物語は始まった。

三章ノ一 恐怖ノテ

目覚ましが鳴っている。

止めようと思うが眠気がじゃまをする。

「うーん……」

坂井 歩はベッドから身を起こすと眠たい目をこすりながら目覚ましを止めた。時間を見ると午前九時。

いつもなら学校があるため大遅刻だが、今日は休みだ。

本来休みなら歩は昼頃まで寝てるのだが、今日は用事があるので早く起きたのだ。

しかも休みになった理由を考えると悠々と寝ていられる気分でもない。

休みになった理由とは一人の少女が自殺したため救急休みになったのだ。

歩はまだ満足に動かない体をベッドいっぱい伸ばした。

「くう……」

こんなときは思わず声が漏れてしまう。

歩は眠たい体を無理やり動かし洗面所に向かった。

洗面所に着き自分の顔を洗っていると一つ気がついたことがあった。目の下にうっすらと隈が出来ている。

おそらく昨日まともに寝れなかったからだだろう。

歩は昨日、和泉と別れた後悠也と一緒に家まで向かった。

歩と悠也の家は近く帰り道が一緒だからだ。

二人は小さいころから仲がよいいわゆる幼なじみなのだ。

しかしそんな二人も昨日の帰り道は憂鬱だった。

和泉に協力すると言ったはものの恐怖や不安が無いわけではない。

和泉と別れ一人で思考しているといい様のない恐怖に襲われた。

きつと悠也も一緒だろう。気づけばむしろ和泉の期待に答える気持

ちより恐怖と不安のが大きくなっていた。
そんなときおもむろに悠也が話しかけてきた。

「和泉はこの事件のことをどんくらい知ってるのかな？」
確かにそれは歩も考えていたことだった。

和泉はこの事件の何を知り、何を為そうとしているのか。
気にはなったがあの場合では聞くに聞けなかった。

「さあ……」

歩は曖昧に返事をした。

そんな会話をしながら歩と悠也は帰宅した。

歩は家に帰りしばらくボーっとしていた。

一日の間に色々とありすぎた。

しばらくすると意識が朦朧としてきた。

……

そして朦朧とした意識で部屋のドアを見ると半分開いていた。

閉めに行くのもめんどくさかったので放っておいた。するとドアから何か擦れる音がしたので見てみると無数の手が飛び出していたのだ。

「っ……！」

歩は驚きを隠せず声を上げた。

あの手だ。

和泉にまわりついていった手。

とうとう自分の所にも来たのだ。

手はドアから少しずつ伸びてきて、こっちに近づいてくる。

逃げようとしても恐怖で体が動かない。

しかしそれでも手は伸び続けて腕が異常な長さになっている。

歩は恐怖し精神がパニックを起こしていた。

そしてとうとう手が歩の目の前まで来た。

「来るなああ！」

瞬間、目が覚めた。

どうやらいつのまにか眠りについてたようだ。
ポーンとしていたときだろうか？

しかし妙に現実味を帯びた夢だった。

時計を見ると時刻はすでに午前二時を回っていた。

歩は結構な時間、寝ていたらしい。

今日は悠也と会う約束があるが、集合時間は十時。

約束の時間まで、まだ八時間近くある。

もう一度寝ようと思ったのだが、妙に目が冴えてしまっていたため寝れそうにない。

歩はふとドアを見た。

半分ほど開いていた。

「……閉めよう」

あんな夢を見た後だからかもしれないが、ドアが開いているのがすごい気になった。

そして閉めに行こうと思ったのだが中々体が動いてくれない。

「もしドアを閉めに行った瞬間に手が出てきたらどうしよう？」

そんな考えに襲われていたのだ。

しかしその考えとは逆に

「早くドアを閉めないとな手が入ってくる」

という考にも襲われた。

歩はしぶしぶだがドアを閉めに行った。

実際、あっさりとドアは閉まった。

「はぁ……」

歩はため息をついていた。こんなにも精神が敏感になっているのは久しぶり、いや、もしかしたら初めてかもしれない。

約束の時間までなにをしよう？

再びベッドに横になり考えていた。

「桜か……」

桜と言うのは美しさの他に、何かを持っていると歩は思っていた。人間で例えるならば、妖艶、と言うのが一番近いのだろうか？

桜には人を引き付ける魔力がある。

実際、桜をモチーフにした作品は少なくはない。

「桜に引き付けられて死んだ少女か……」
なんとも劇的な死に方なんだろう。

歩はそんなことをずっと考えていた。

何故少女は死んだ？

何を和泉は知っている？

何故自分は関わった？

何に和泉は関わっている？何故……

思考を続けたが何も答えはでてこなかった。

思考を続けるうちに睡魔が来たらしく歩はベッドで完全に寝る体勢になった。

時刻を見ると五時、今から寝ても四時間は寝れる。

歩はベッドに深々と体を沈め、すぐに眠りの世界に引きずり込まれた。

そして朝になった。

歩は顔を洗い終わると部屋まで向かった。

途中、台所により朝ご飯を部屋まで持っていった。

そして部屋に入り出かける準備を始めた。

朝ご飯を食べ、服を着替え、寝癖を整えた。

すべての準備が終わったのは九時四十五分。

時間もちょうどよく悠也との待ち合わせの場所まで向かう事にした。
こうして事件の調査の一日は始まった。

三章ノ二 分担サギヨウ

悠也達は家の近くのコンビニで待ち合わせをすることにしていた。悠也がコンビニに着いたとき歩の姿はまだなかった。

「ちよつと早かったか？」

そんなことを一人でぼやきながら悠也は時計を見てみた。

時間は九時五十五分。

ちよつどいい時間だったのだが歩の姿がない。

当然と言えば当然だろう。

歩は時間にはとても厳しく遅れることを許さない。

だが歩は早く来るわけではなく、時間ピッタリに来る男なのだ。

相変わらずだな・・・などと悠也は思いながら歩をまつことにした。

すこし考えていると昨日の夢の事を思い出した。

悠也は昨日不思議な夢を見た。

内容は意味がわからなく、歩が白い手に引かれどこかに連れてかれてしまうというものだった。

何か引つ掛かったが夢なので気にしなかった。

悠也は幽霊、夢、諺など確証の無いものはあまり信じない性格だった。

きつとこの夢は昨日いろいろあったからだろうと、悠也は思っていた。

そんなことを考えていると歩が歩いて来るのが見えた。

「おはよー」

「おはよー」

二人はいつも通りの言葉を交わした。

「なんか作戦とか考えてきたか？」

笑いながら悠也が聞いた。

「考えてないからー」

歩も笑いながら答えた。

それでも最初に決めるべき事は二人ともわかっていた。
桜か少女か。

悠也は少女を調べたいと考えていた。

少女の行動を探れば何かしら事件のヒントがでてくるんじゃないか
と思っていた。

だが一応悠也は歩に聞いてみた。

「どっちから調べる？」

「どっちからでもない」

「……？」

意外な返事に悠也は驚いていた。

少し頭が混乱しながらも聞いてみた。

「どういう意味だ？」

歩は迷うことなく答えた。

「せっかく二人いるのに二人で同じことを調べる必要はないよ。時
間もあるわけじゃないしね。だから二人で別々の事を調べよう」

悠也は納得した。

確かにそっちのが効率良く調べられるだろう。

しかしちよつと不安だなあと思いながらも納得した。

「わかった。歩はどっちを調べたい？」

悠也は少女を調べたかったので歩と意見が一緒になったらどうしよ
うかと思っていた。

「桜。人関わりは得意じゃないから」

歩は苦笑しながら答えた。確かに歩は人探しとかは得意じゃない。

昔からだ歩は極度の上がり屋なのだ。

だから全く知らない人に歩から話かけることはあまりない。

そのため歩が和泉に話しかけたと聞いた時はとても驚いた。

それに比べて悠也は意気の合いそうな人には大抵話かけるような陽
気な性格だった。

「じゃあ俺は女の子な」

悠也はこの振り分けはちょうどいいと思った。しかし調べるにしてもどうしようかと思った。

今日は学校が休みなのだ。生徒に聞くにしても生徒がいない。歩ならなにか考えていると思いついてみた。

「でもよお、どうやって調べるんだ？今日は生徒もいないぞ？」

歩は抜けてるところが多いが人が関わる時間や行動には計画性があるのだ。

「とりあえず妥当に図書館かな。図書館で学校がいつできたのか、大桜がいつ植えられたのかを調べたい」

「女の子は？」

歩の計画はいいと思ったがそれでは少女のことが調べられない。悠也としては少女が本命なのだ。

図書館に行っても到底一人の少女のことを調べるのは無理だ。

「悠也さあ、課題の宿題はやった？」

「・・・？」

いきなり意味のわからない質問をされて少し頭が混乱した。

なぜ少女の話をしていて宿題になるんだ？

歩が悠也の様子を悟ったよう言葉付け足した。

「いやね、あの最近もらった宿題だよ。『この学校に入学してみて』

みたいなやつ。今日は自宅学習日だろ？なら学習のために学校で資

料をもらいにいかない」と

そこまで言われて悠也は理解した。

つまり歩は悠也に学校に行つてこいと言いたいのだ。

だが確かに自宅学習日というのを使うのはいい手だ。資料が欲しい、勉強道具を忘れた、貴重品を忘れた・・・考えてみれば様々な理由で学校に行くことができる。

そのついでに先生とかに探りをいれればいい。

そういえば何人かの生徒は今日学校から呼び出しをくらったらしい。たぶん少女の関係者とかだろう。

この時間から行けば会える確率は高い。

先生と生徒に話を聞ければかなりの収穫になる。

たぶん歩はこの呼び出しをくらった生徒に話を聞いてこいと言うのが本命だろう。

そこまで思考していると歩が思い通りの言葉をかけてきた。

「ちなみに今日は昨日の事件の少女に関係が深い人とかが呼び出されているらしいよ」

「・・・そつちが本命のくせによ」

悠也はちよつといじけたように言った。

かなりいいように使われてるからだ。

歩は言葉で人を誘導するのがうまい。

今さら悠也は断れるはずもなく渋々とその作戦を承諾した。

「まあね。でもこれは悠也にしかできないんだ。僕じゃできないからね。だからお互いに頑張ろう」

「おう。じゃあ俺は学校にいくな」

「じゃあね。三時に一回連絡を取ろう」

悠也は了解、と一言残し学校へと向かった。

そして歩は図書館へ。

二人は本格的に動き出した。

図書カン

坂井歩は友人と別れたあと、町にある図書館に向かった。

図書館はさほど遠くなく十分も歩くとついた。

この和泉市には図書館が一つしかないのだ。

この図書館は学校とも合同になっておりかなり規模がかなり大きいものとなっている。

学校に関する歴史の本は必ずここにあるのだ。

なのでここを利用する生徒はかなり多い。

その証拠に休みだというのに図書館に入ってくる生徒の姿がちらほらと見える。

図書館は見上げるほど大きく、いつも通ってる学校の一回りは大きいだろう。

「はぁ……」

その大きな図書館を見上げると思わずため息がでてきた。

ここを調べると思うと気が遠くなりそうだ。

しかしここまでできて引き返すことができないので、歩は図書館へと歩き出した。

『和泉中央図書館』

看板には大きくそう書かれていた。

まず入り口で受付の人に入館カードを出し中に入った。

この図書館は登録利用制で入館カードがないと利用できないのだ。

「さて……どうするか」

最初に歩はこの町の歴史を調べるために歴史のコーナーに向かった。本を探しているとすぐに思惑通りの本が見つかった。

『和泉市歴史探』

そう書かれた本にはこの町の歴史がかなり細部に書かれていた。

この本によると和泉ヶ丘高等学校は比較的最近にできたらしい。

およそ20年前、この町の名家

「和泉」の家が統合しあの学校を作ったそうだ。あの学校がいつできたのかはわかったが、桜がいつ植えられたかまでは書いていなかった。

「どうするかな・・・」本を読んでいくととても意外なことが書いてあった。この町自体がつい最近できたらしくはるか昔この町は『水桜市』と呼ばれていたらしい。

「また桜か・・・」

歩は思う、最近桜に関わると不思議なことが起きる。これじゃあまるで呪われているみたいだ。

しかし歩は不思議な事に関わるのが好きなので、桜に関わろうとするのをやめない。

しかしこの好奇心があとあとになって後悔することになるとは誰も想像すらしなかった。

その後二時間くらいかけて一通りみてみたがさっきのような手がかりは見つからなかった。

歩は違うコーナーに移ることにした。

学校の資料コーナーに行くことにした。

あんがい本の量は多くまたもや時間がかかりそうだ。司書の人は見あたらない。ここには歩しかいないようだ。

そういえばこのこのコーナーは図書館の角にあつて、ここらにはあまり人気がない。

「なんか不気味だな」

先ほどまで学生の姿がちらほらと見えていたのにここには一人もいなかった。

学校の資料があるんだから一人や二人いてもおかしくないと思うのだが。

あんな事件の事を調べているということもあり、気分は暗鬱になっていった。

「はあ・・・」

今日何度目かのため息を吐き、資料を探した。

資料探しはやはりはかどらず、精神が疲れていった。

一時間ほどたったときやつと関連のあるものが見つかった。

それはただの学校の紹介本にのつていた。

「こんなところに載せるなよ・・・」

この資料によると学校のシンボルの桜は二年前にある会社から引き取ったらしい。

何でも

「園芸部」が学校に頼み交渉の結果植えられたらしい。

「ということは園芸部が怪しいな・・・」

歩は大体のことをメモし、日下部と連絡を取ろうと思い、図書館を出ることにした。

・・・

コーナールの目の前に少女が立っていた。

一瞬意識が飛びそうになった。

目の前にいた少女はこちらをまっすぐと見つめていた。

目は海のような蒼、髪は金と茶の間のような色、一見外国人にも見えるが

顔の輪郭は日本人そのものだった。

その蒼くキリツとした目はまっすぐと僕をとらえていた。

目をそらすことができない、そればその瞬間に命でももっていかれそうだ。

歩はこのままじゃ精神的に耐えられないと思い言葉を発した。

「・・・どうしたの？」

たぶん声が震えていたが、あの沈黙よりはいくらかましだ。

「あなたは関わらない方がいいと思うわ。いいことないわよ？」

少女はいきなりわけのわからないことを言った。

しかしあまりに的を射てるセリフに歩の緊張感は最大になった。

なぜ初めてあつた少女にそんなことを言われる？

少女はなにを知っている？少女は何をたくらんでいる？

少女は何者だ？

思考だけが空回りしてだんだんと混乱状態になっていた。

「まあ今更遅いかもね。じゃあまた会いましょう」

少女はそんなセリフを残し歩の前から消えた。

呼び止めようとしたが声が発せられなかった。

去っていくときの後ろ姿がとても綺麗で髪は絹の用に揺れていた。

さっきとは違った意味で目が離せなくなった。

歩はしばらく放心したあと、ゆっくりとした動作で図書館を出て悠也に電話をかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9671f/>

stigma ~ 桜のお話 ~

2010年10月11日21時40分発行